

# 西脇順三郎世界

## 一 土人の生態

「ラオコオーン」のような自伝が

描けないただ

とんぼ

蟻

かたばみ鬼百合

ほうせんか

しおん

と殆ど区別が出来なく溶けこんで  
発生したことは僕という牧人の

村田 美穂子

田舎曆だ。

第三の神話―「自伝」冒頭部

詩人は自らを「牧人」などといっているがそれは多少すました表現なのであって、その正体は、実は「土人」なのである。西脇世界においては石器時代そのままの生活をしている、例えばニューギニア奥地あたりの未開の地の原住民も、ヨーロッパ人の敬慕的である古代ギリシャの市民達も、それらは皆おしなべて「土人」という名の下に同等なのだ。それは、西脇世界では人間というものが土の上で生命を得て土の上で死ぬ一個の「もの」として考えられているからである<sup>(1)</sup>。だから自らの生誕を語るときも「発生」といい、しかもとんぼやらほうせんかやらと殆ど区別ができなかった、ととぼけてみせる。「セーロン」(Anbaralaia)所収)という作品では、炎天下ひとり歩く詩人を見たものは「トカゲ」「茄子」「堇」であった。また「女の野原」(「豊饒の女神」所収)では、

おぼえているのは……あまりない

ふくべとあんずとからす

げんごろうむしとふなだ

という。そういったようなものを、西脇順三郎という詩人は「つまらない」といってたいそう好むのである。「ひょうたん」「がんもどき」「どぶろく」「ふんどし」「タビラコ」「どんぐり」「あかのまんま」「スカンポ」「うどん」「おかみさん」等々、日常卑近なものが大好きなのだ。それらはそのものの自体としても充分に詩人の好みに耐え得るが、そのことばのおもしろみがそのものの魅力を一層増さしめるともいえるだろう。詩人のことばを借りれば、それ

らはみな「下等」なものなのである。土くさく、生活くさく、したたかに人間の歴史を支えてきたものたちである。士人とは切っても切れない、なつかしいものたちである。

しかし、西脇世界の真の基盤は旅にある。それは有体にいえば、散歩とか気まぐれな訪問、あるいはドライブ程度のものがほとんどである。旅といっても、自宅の門を一步出たときから詩人の旅は始まるのである。詩人にとって、旅とは歩くことなのである。そしてその旅の目的は見ることである。歩かなければ見えないものがあると詩人は言う。芭蕉の「よくみれば薺花さく垣ねかな」は詩人のお気に入り句であるが、薺、つまりペンペン草などを垣根に見見るといことが詩人の旅の目的なのである。詩人は植物が好きである。中でも特に野原の雑草にたいへん造詣が深い。西脇世界には百種類を超える植物が登場しているが、特に雑草に関してはそのほとんどが正式な和名で表現されているほどである。旅に行く詩人は名前のわからない植物に出会うととたんに憂鬱になり、その名をつきとめるまでは心が晴れないのである。そこで道端の老人などに、

「この細い<sup>こまか</sup>花の咲く木は何といいますか」

ときいてみる。

「それはなんです、よそぞめとかいいまして

秋になると赤い実がなり、この辺では

十五夜に、すすきと一緒にかざるのです」

近代の寓話「午後の訪問」部分

というような場面を演じたりすることになる。それでもよくわからない場合には、帰宅しながら牧野富太郎の図鑑

などで調べてみるらしい<sup>(2)</sup>。こうして目に入る雑草や樹木のひとつひとつを見分けながら、詩人は旅を行くのである。では、なぜ詩人は植物にひかれるのか。植物のどんな点にひかれているのか。この問いは、西脇順三郎という土人の生態を知るのに重要である。

「自伝」で明らかのように、詩人には「人間は万物の霊長である」などというような気負いが全くない。人間として土の上で生命を得て土の上で死ぬ「もの」である以上、植物と何らの変わりもないはずである。植物、特に雑草を見ていけば、土の上に生きて死ぬ人間の現実が端的にわかるといふものだ。詩人が植物にひかれるのは、こうした植物への親近感の故なのである。

「肉体も草花もあたしには同じだわ」

「アン・ヴァロニカ」(近代の寓話)所収)に登場する女のつぶやきである。

また詩人は、植物の中でも特に実のついたものを好む。実(あるいは果・種)は生命の存続を意味するものである。自然界に生を受けたものすべてがいとなんでいる、ごくありふれたことである。詩人は植物の実を見ては生命を考える。土の上の生命、土人の生命ということを考える。生命は暗さである。西脇世界において、生命は決して晴れやかではない。だが、否定もしない。詩人はただ土の上の現実を見つめるだけである。それには旅が良い。生垣があり、藪が繁り、曲がった道が野に続いている。そんな西脇世界の風景の中を旅するとき、詩人は芭蕉のように、ペン草のひと群れに発見の喜びを知るのである。それは西脇詩学の初めである。発見する対象はつまらなければつまらないほど良い。下等であればあるほど良い。生きているということを考えさせるには、そういうものほど良いのである。そこで詩人は生命ということを知るのである。生きているということとはどういうことなのか。詩人の脳髓は、

ペンペン草の発見に一種の「淋しさ」を覚える。それが生きているということなのである。西脇詩学はこの「淋しさ」を基本にしている。発見は喜びであるが、それは「淋しさ」の喜びである。そしてそれはまた、死の予感であるかもしれない。

宗教としては、永遠の生命と人生とを比較して、永遠の生命を求めよという。併し永遠は永遠として続くが、人間の生命は永遠につづかない。永遠の生命というものはない。

これは原始人が残していた生物学である。

これは大変に淋しいパンセだ。

原始的淋しさは存在という情念から来る。

「*Tristis post Coitum*」<sup>(3)</sup>の類で原始的だ。

孤独、絶望、は根本的なパンセだ。

生命の根本的情念である。

またこれは美的情念でもある。

梨の女「詩の幽玄」5より

西脇詩学をあえて哲学とよぶなら、ここにその哲学の無量のほほえみがある。「孤独」も「絶望」も、それらが実に基本的な土人の現実であると知れば、人間はかえって救われるのではないだろうか。詩はそこに淋しい光を発するのである。「永遠」の前で、土人はただひたすらに受動的である。人間は土人なのであって、「神」ではないからだ。

神は超自然であるが人間は

自然の法則による自然そのものだ

人類Ⅱ「ケヤキノキ」部分

人間はこの「自然の法則」から脱することができない。それは不可解な、そして絶対的な法則である。「神」が直線ならば、人間は蔓草の蔓なのだ。蔓はまっすぐに延ばしたら枯れてしまう<sup>(4)</sup>。人間は「神」になれないのである。人間は土人なのである。西脇世界はこの現実のみを素材として成り立っているのだ。土の上で生命を得て土の上で死ぬ「もの」としての人間、土人の現実、死に向かう現実なのである。

そんな現実には詩人は決して逆らわない。雑草のように従順に、土の上で生命を得てそしてやがては土の上で死んでいくのであろう。

地上をなんとなく

トボトボと眼光の終るまで

歩いている

人類Ⅲ「秋」冒頭部

これが西脇順三郎という土人のあり方なのである。

二 女の音がきこえる

詩人は旅を行く。藪があればのぞいてみる。そこに繁っている植物は何か。そこからんでいる蔓草の名は何というか。詩人の目は細かい。若き日に画家を志したほどの目である。見るということ、発見することに対する興味の深さ、鋭さはすごい。しかしそれだけではない。西脇順三郎という詩人は、目ばかりでなく鼻もよくきく。

この植物は人間は単なる生物で

あるということをその臭みで

よく教訓をたれてくれた

壤歌Ⅱ部分

「この植物」とは、強い臭いを発することからその名がついたという「クソニンジン」である。詩人はこうしてまた雑草によって土人の現実を教えられたわけである。また、詩人の鼻はなぜか菊の香と水仙の香に対して特別に鋭敏である。しかしより重要な感覚器官としては、鼻よりもむしろ耳をあげることができるのではないか。

羅馬の宿で噴水の音にねむられない

あのボールの血統をうけた男も

蟋蟀の音におびえるマクベスも

人間の存在を語る唯一の音を避けた

失われた時Ⅱ部分

「噴水の音」、「蟋蟀の音」。西脇世界で最も重要な音がこのふたつの音である。水の流れる音とおろぎの鳴き声。詩人の耳は鋭くこれらの音をとらえ、またもや土人の現実を思うのだ。生命ということを考えるのである。しかし誤解してはいけない。このふたつの音のうち、特に水の方は俗にいうところの「風流」とは全く違うものなのである。

夜中の様に もろ／＼の泉が沸騰してゐる

人は皆我が魂もあんなでないことを願ふ

Ambarvalia 「失樂園・世界開闢説」部分

この「泉」の正体は、なんと共同便所なのである。土人の面目躍如といったところか。生きているということとは、つまりそういうことなのである。つまらないといえ、これほどつまらない音は他にないであろう。実に、この放尿の音が西脇世界では音の中の音なのである。

もうひとつの音はおろぎは、シェイクスピアの「マクベス」にそもその出典を求めることができるが、そればかりでなく、虫の音によって秋の訪れを知る日本の美意識と無関係ではない。詩人は四季めぐりに非常に敏感で、特に夏から秋へと移り変わる時期の作品が多い。詩人の夏は生命力旺盛な、雑草の生い繁る夏である。そして詩人の秋は夏の隆盛が衰退へと向う季節である。おろぎの鳴き声というのは、これらのことと深く結びついて詩人の脳髓に響く。

おろぎの中で

永遠の存在はねむらない



「永遠」ということを考えている間は生きている証拠である。「永遠」は透明であり、生命というものはそれをくもらせるものである。くもらせるということ、その意味での暗さが生きているということである。生きているということとは淋しい。放尿の音はそれ自身が淋しい。こおろぎの鳴き声は聞こえたときに淋しい。この「淋しさ」は生きていることの「淋しさ」、生命の「淋しさ」である。土の上で生命を得て土の上で死ぬ「もの」の宿命的な淋しさである。つまらないもの、下等なものが、この「淋しさ」、つまり土人の現実を教えてくれる。「永遠」という透明なものと生命という暗さの対比。有限である生命は、しかし「永遠」を束の間くもらせているのだ。ここに詩の存在の可能性がある。

では、最もつまらない音とはどんな音か。詩人が細心の注意をもって耳を傾け、求めている音とは何か。それが女の音、女の放尿の音なのである。なぜ人間の音といわずに女の音なのか。西脇詩学においては、最もつまらないということは最高のほめことばにも値する。詩の根本、美の究極ということと同等である。それがなぜ女の音なのか。以下では、西脇順三郎の女性観とでもいべきものを少しさぐってみようと思う。

生きる目的、存在の意味を考えるとすることは、哲学史の上でいつ誰がどのように考えた、などということである以上に、いつも誰もがなんとなく、あるいは必死に考えていることである。西脇順三郎という詩人もいつもこのことを考えている。しかし彼は土人の中の土人であるから、こういう問題を考えるときの結論は簡潔である。

人間の生命の目的は他の動物や植物と同じく生殖して繁殖する盲目的な無情な運命を示す。

「詩情」(あむばるわりあ・あとがき)より

生命の存続ということである。単に生きるということ以上に、生命を続けるということなのである。道端に繁る雑草が実を結ぶのと同様に、土の上で生命を得て、そして種の保存、継続といういとなみを経て、土の上で死んでいく。人間といえどそれ以上に生きる目的というのはない、という考え方である。ただ単に生まれて死ぬのではない。生命としてある間に生殖を行わなければならないという、もうひとつの現実である。生命の暗さである。その目的は透明な「永遠」をくもらせる。そして、くもらせるものがなければ「永遠」は見えない。つまらないものほど「永遠」をよくくもらせる。「永遠」が見えたときが詩だ。ここで詩人は女ということを考える。生殖、繁殖の主役としての女というのが、詩人の求める詩の中心となってくる。

女は人間の存在それ自身だ。男はただそれを助けるのみに存在の可能性があるのであるのみだ。男は女の生命の儀式を助けるのみだ』

近代の寓話「草の葉」Ⅳ部分

「生きる」ということが「生命の存続」ということに拡大されたとき、音は共同便所の音から女の音へと限られてくる。西脇世界の女というのは植物のめしべと大差がない。それは自然界の中心であり、男にとつての恋愛の相手である以前から女であり、女としてあるのである。西脇世界に恋愛詩がない原因というのもこのあたりにあるのである。いとしい女、かわいい女である前に、「女は人間の存在それ自身」なのである。そんな女の代表的な姿、西脇世界における最も詩的な姿が「しゃがむ女」である。

渡し場に

しやがむ女の  
淋しき

旅人かへらず九〇

魚を釣つてゐる女が  
静かにしやがんでゐた  
世にも珍しきことかな

旅人かへらず一二六最終部

土を思い白鳥のように  
濡れて野にしやがむ女の薔薇水の

近代の寓話「フエト・シャンベエトル」Ⅱ 4 冒頭部

この多摩の女のせせらぎに  
(二行略)  
やるせない宿命があるのだ

近代の寓話「プロサラミョン」部分

女はしばらく藪の下にかくれた

谷川のせせらぎにきく

秋の日のあまりある言葉に

果てしのない存在の

のびで行くすがたが

岩にぶつかつてまたくずれてゆく

失われた時Ⅱ部分

永遠にやるせない音を残して

女は便所からもどつてまた

えてるにたす「菜園の妖術」部分

河原で自然の女神の泉の

音を聞いた

宝石の眠り「すもも」部分

以上の引用がすべて、放尿する女、あるいは女の放尿であるとは断定できないが、そう考えることは西脇世界においてはや当であろう。

女から

生垣へ

投げられた拋物線は

美しい人間の孤独へ憧れる人間の

生命線である

近代の寓話「キャサリン」冒頭部

この生命線の正体もおそらくは尿なのである。つまり男も女も同様に土人でありながら、土人として最も日常卑近な姿、最もつまらない姿は女にだけ許されているのだ。それが西脇世界なのである。女は生命の目的を果たすうえで自然界の中心に位置している。それは西脇世界における詩学の根本である。西脇順三郎という詩人は生命愛にあふれた詩人である。子を宿し、産んで育てる女というものに対して抱く神秘の念をどうすることもできないのだ。「永遠」をくもらせる生命のいとなみ、その無心さをただ肯定するだけである。

生きようとする欲望は無限だ

そこに人間存在の哀愁が光る

人類Ⅱ「タンボボ」部分

詩人は「欲望」を否定しない。ただ、そこに詩をみるのである。それはとりもなおさず詩人自身の肯定である。「哀愁」を感じることが存在している証なのだから。つまり、詩人はその証に出会うために歩きまわるのである。生きていく限り、詩人の旅は続くのだ。「永遠」をくもらせる生命の無心ないとなみに我が身を照らすことで、詩人は

自らをいとおしんでいるのである。だからこそ、愛する生命の中心に位置する女の、その女の音に耳傾ける土人の身を否定しないのだ。

あまたあの音が聞える  
あの女の音が聞える

もうわからなくなつた  
あのせせらぎのせせらぎの  
そのせせらぎの

あの絃琴のせせらぎ！

あまたわからなくなつた

オオ バ ババイ

ああ あのすべては  
すべてでなくなつた

ああ すべては流れている

またすべては流れている

ああ また生垣の後に

女の音がする

人間の苦しみの音がする  
クルベの女が夢をみている  
ああ また音がする  
それはすべての音だ

これは確かに  
すべての音だ

私は私でないものに  
私を発見する音だ

これは秋の音だ

ガラスの空しい思いの  
多摩の石の音だ

これはまたケヤキの木の音だ  
マラルメの音だ

私の中に水が流れる音だ  
アエスキロスの蛙の音だ  
これはまた衣を洗う音だ  
冠を洗う音だ

カーテンの後の音だ

ああ あの毛髪のきらめきの音だ

これからが大変に難しくなる

音が人間の音になる

すべての音は人間がおそれる音だ

殺人の音だ

こおろぎの鳴く音だ

ああ 音が去つて行く

ただ一つの女の音が残る

ナデシコの静けさ

禮記「野原の夢」部分

すべてが消えても女は残る。生命の目的を一身に担っているからである。そして、女がある間は女によって「永遠」はくもるのである。その限りにおいて西脇詩学は生き続ける。詩人の意識は、土人として女に傾いてやまない。

### 三 運命はサークル

西脇世界には恋愛詩がない。しかしそれは詩人が恋愛を否定しているためではない。西脇世界にもエロスはあるし、かすかなエロチシズムはそこかしこにうかがうことができるのである。ただ詩人はこの問題に関してはたいそう



慎み深いために、赤裸々な恋心<sup>れんしん</sup>の表白をしないだけなのだ。また西脇世界の恋愛というのは人間の必然なのであり、個人の感情、個人のドラマとして描かれるほどの特筆には値しないのである。これは、人間が土の上で生命を得て土の上で死んでいく「もの」である以上当然のことであろう。「もの」は生命としてある間に皆異性を求めるのである。それが西脇世界における恋愛である。素朴といえは素朴であり、つまらないといえは確かにつまらない。しかしこの恋愛観は恋愛の軽視を意味するのではなく、恋愛の重視を意味する。

詩の淋しさというのは、恐らく本当は存在自身の淋しさであろうが、恋愛は存在の中で最も代表的であり中心的な人間存在の現われであるだろう……（以下略）

斜塔の迷信「考えをかくすもの」より

「人間存在の現われ」として恋愛をとらえているのである。恋愛といえは性愛であろうが、それはいうまでもなく人間に男性と女性という区別があるために生じる。恋愛の起因はそれだけに原始的である。西脇詩字はその原始的な起因にまでさかのぼる。

人間が女と男に分裂したことはかなしい

近代の寓話「夏から秋へ」部分

驚きは

すべての

光の  
生命の  
分裂の  
悲しみ  
だ  
よ  
お

禮記「数学」部分

恋愛の淋しさは最大の淋しさであり、それは分裂への哀歌である。しかし、西脇世界においては男と女は同等ではない。あくまでもその中心は女なのである。男はそのまわりをただうろろと歩きまわる存在であるにとどまる。

男は単におしべであり、蜂であり、恋風にすぎない。

旅人かへらず・はしがきより

「すぎない」立場としての男。その中のひとりとして、西脇順三郎は旅に身を置くのであろう。それは詩を求める旅であり、あるいは男だけに許された行脚なのかもしれない。しかし、なぜかくも歩くのか。なぜ詩を求めるのか。「永遠」のくもりを見えるということ、「永遠」に向かうということはいったい何を意味するのか。それが、今この場に残された最後の問題である。

西脇世界はめぐる世界である。日のめぐり、季節のめぐり、年のめぐりの世界である。めぐるということは、始まったものが終わり、また始まる、ということである。西脇世界の一日は朝と夕に象徴される。昼と夜の分かれ目である朝と夕は空の色の微妙な変化などと相俟って、西脇世界を彩る特徴的な時間帯のひとつだ。また西脇世界の季節は夏から秋に至る移り変わりをほぼ中心としており、年のめぐりの起点は元旦にある。詩人が元旦を迎えるときの気分というのはたいへんにおごそかで、そのことは十七編の元旦の詩にうかがうことが容易である。中に次のような数行がある。

はてしなくめぐる

この野原にさすらう

人間のために

あかつきの土の杯に

霜の濁酒をそそいで

今朝の天空の光を祝う

なんという栄華か

豆のかゆをすすつて

あつい生命のほとばしる

みなもとをひそかに祝う

しかし、詩人の元旦は新年の抱負を述べたてのような建設的なものではない。詩人の脳髓は、一年という単位が地球の公転周期であることを決して忘れていない。

ああ太陽のまわりをまた

生物が繁殖するこの惑星が

苦悩と悦楽の回転を始めた。

人類Ⅲ「元旦」冒頭部

「また」ということなのである。もとに戻り、また始まる日、それが西脇世界の元旦である。終わることと始まることが背中合わせになっているということ、始まらなければ終わらず、終わらなければ始まらない世界。詩人はそこで人間の始まりと終わり、つまり生と死のことをあえて問うことをしない。それは自然の法則に従順な土人には縁の薄い問いだからである。しかし、やはり無関心ではいられない。ここにおいて詩人の旅は単に地球上の表面を移動する旅ではなく、心の旅ともなるのである。低血圧のためであらうあおざめた顔に白髪かくしのソフトをかぶって旅を行く詩人は、心の地平をもさまよっているのであった。そして、ついにこうつぶやく。

すべては回転して

終るのだ

禮記「梵」部分

終わることによって「永遠」は始まるのである。詩人の「永遠」は終わることによって始まるのだ。

友人は列をなして行く

とび魚のように海を越えて

地平のむこうの永遠へ帰って行く

禮記「田楽」部分

何人も永遠へもどるために

月を待たず旅立つのか

禮記「田園の憂鬱」部分

「永遠へ帰」る、「永遠へもどる」。それは死ということである。「田園の憂鬱」という作品は「哀歌」という副題がついており、佐藤春夫追悼の詩であることはよく知られているが、そういった事情を踏まえてこのふたつの引用を考えてみると、「永遠」というものが人間のふるさとであったことに気づくのである。「永遠」はもどって行くところ、帰って行くところ、人間が最後に行き着くところなのであった。だからこそ、帰るべきふるさとであるからこそ、詩人は「永遠」を求めてやまないのである。その旅は、あるいは死という運命を諦めるためのものであるかもしれない。また、男という立場に置かれた者の宿命的な放浪でもあろう。旅人のうしろ姿は孤独な男の影である。「永遠」を求めるということは、「永遠」への可能性としての女を求めるということだからである。

人舟を望遠鏡でみる九歳の少年は  
母胎を憶れる神々しい子宮の祈禱だ

失われた時Ⅱ部分

この少年は西鶴の「好色一代男」の主人公であろうから、生涯をかけて女を求め尽した男の物語を思うとき、女を求めるということはすべて自然界の中心への回帰願望を示すということになる。女へ、女へとすべてが寄り集まって行く。それは「永遠」を知るための手段であり、結果である。

鶏頭の酒を

真珠のコップへ

つげ

いけツバメの奴

野ばらのコップへ

角笛のように

髪をとがらせる

女へ

第三の神話Ⅰ「フレリユード」☆ ポウスト・スクリプト部分

靈魂の旅は女の端に終る

すべての夢はあの女の真珠のコップに  
向つて消える

第三の神話Ⅱ「第三の神話」部分

「真珠のコップへ」「野ばらのコップへ」「女へ」と三者が同列であること、また「あの女の真珠のコップ」という表現があることに注目したい。「コップ」としての女なのである。それは受け容れる物であり、その内側（内部）にのみ存在の可能性を許すものである。

種は再び種になる

花を通り

果を通り

人の種も再び人の種となる

童女の花を通り

蘭草の果を通り

この永劫の水車

かなしげにまわる

水は流れ

車はめぐり

また流れ去る

「蘭草」は「卵巢」に通じる。生命ということ、人生ということを考える上で決して避けては通れない「女」というもの。そして、詩ということ。男が詩人であるなら、女は詩そのものである。人生としては女にも死があるし、その点においては女も男と変わるところはない。しかし「種」ということ、「人の種」ということを考えるとき、そこには男の入りこむ余地は全く残されていないのである。

女は男の種を宿すといふが

それは神話だ

女の中に種があんべ

男なんざ光線とかいふもんだ

蜂か風みたいなものだ』

旅人かへらず一六一最終部

これが西脇世界である。「永劫の水車」に水は流れ、流れ去って行くが、水車は止まらない。女の故である。「永遠」はくもるであろう。この水車のめぐる限り、「永遠」は透明にならない。旅に行く詩人の脳髄はそんなことを思いつつふるさつを指している。

人間の運命はサークル



初めは終りであるひとつのもの

えてるにたす「菜園の妖術」部分

大きく円を描いて戻ろうとしているのだ。地球が太陽のまわりをまわるように、もとのところへ戻ろうとしている。女といわず、男といわず、すべて人間はそうして来たるべき死へと向いているのだ。「永遠」を考えるということは、人間が「もの」であるということを思い知る手段であったのだ。しかし、「もの」である、死に向かうという土人のこの現実には、ふるさとへ帰るといふ意味でどこか安らいだものである。詩人は、土人のことはその現実をおどけてみせる。

生物のふるさとも永遠ちう

村なんだんべ

壤歌Ⅳ部分

芸術といい、詩というとき、このことを忘れてはいけない。少なくとも西脇世界を考えるためには最重要のことである。人間はいつか必ずふるさとへ戻る。この意識があるからこそ人間は神と区別され、土人としての生涯をおくることができるのである。

「脳髓」ということを詩人は好んで使用する。これは単にアタマという意味に用いられることもあるが、大半はそうではない。詩人の「脳髓」というのは、詩人の目、耳、鼻等の感覚器の集約地点なのである。詩人にとっては理性も感情も、それはすべて「脳髓」なのである。胸の底から湧きあがる情緒というのではない。それが西脇順三郎と

いう詩人の詩作の方法である。

詩人の中には赤裸々な感情吐露に対するはほえましい恥じらいと慎みがある。そのために、詩人の原点を示すことばが「脳髓」という特殊なことばとなったともいえるだろう。「脳髓」といういかめしいことばにはテレかくしの効用も多少はあるはずだからである。西脇順三郎は「脳髓」の詩人であるが、それは難解さをねらう意地悪の演出ではない。それに人間が単なる「もの」であることを思えば、その原点を「脳髓」ということばで表わすというのはいかに唯物物的でもしろいではないか。西脇世界には長詩があるが、その形式は「脳髓」のひとりごとであるといえるし、「西脇順三郎全詩集」の跋文は「脳髓の日記」〔剃刀と林檎〕I所収と名づけられている。西脇世界のすべてのことばは詩人の「脳髓」から発したもののなのである。そして詩とは、その「脳髓」に快感を与えるものとされている。

なぜ快感か。それはここでは問わないことにしよう。ただ、この快感が土人の現実としての死の予感と直結したものだということは事実である。そしてそこに、西脇一流の「淋しさ」があるのである。

淋しさは啓示された神秘の象徴である。存在は淋しい。デカルトの「われ考える故にわれ存す」……(中略)  
 ……は、そばを食うことを考えるのではなく、神の存在とか神の与えた靈魂を考えるとという意味である。象徴的にいうと、淋しさを感じるから私は神の存在を感じるという意味に等しい。「われ存す」ということは神の存在は人間の中に啓示されているという意味であらう。

剃刀と林檎 I 「脳髓の日記」 IV より

「神」ということばについてさして考え込む必要はない。ただ人間は死すべきものであり、それは死と無縁のもの

の前で初めて知ることのできる現実なのだという意味で「神」といったまでなのである。それは「永遠」ということばにおきかえることも可能であろう。西脇世界の「淋しさ」とは存在することの現実的な意味、生きているという実感に伴う否定することのできないものである。この「淋しさ」を感じることは「もの」としての人間である証といえる。そのために人間は我知らずこの「淋しさ」を求めることになる。その顕著な例が恋愛である。西脇世界の恋愛が男女の分裂への哀歌であるというのは、つまり存在の「淋しさ」がそこにあったからなのである。

西脇世界においては、生命の目的は種の存続、中心に位置するのは女、旅は男の宿命、それらに意味を与えるものとして「永遠」あるいは「神」がある。西脇順三郎は男として生まれたばかりに、生命の最も神秘的かつ中心的な境地には足を踏み入れることができずに旅に身を置いている。そんな詩人がとらえた男と女の世界の最も一般的な姿を最後に引いておくことにしよう。

ああ狩人はいのししをとらえて

妻へもどつてくる

豊饒の女神「季節の言葉」最終部

## 注

- (1) 「あむぶるわりあ」のあとがきである「詩情」等に顕著な考え方である。
- (2) 「壊歌」Ⅳに「マキノさんの図鑑」が登場している。
- (3) 「性交の後の悲しさ」の意。あえてラテン語を用いるのは詩人一流の慎しみのためか。
- (4) 「失われた時」Ⅳあたりにうかがうことができる表現。
- (5) 「四十年前の三田の山」(「メモリとヴィジョン」所収)にくわしい。

- (6) 「恋心」をレンシンと読ませることは『近代の寓話』(『近代の寓話』所収)に例がある。
- (7) 「好色一代男」の主人公世之介は九歳の時に屋根の上から遠眼鏡で行水をつかう女をのぞいた。「人舟」は本来は渡海船を意味するが、ここではたらいのことであろう。

底本 西脇順三郎全集(筑摩書房)

詩集「人類」西脇順三郎著(筑摩書房)

参考文献 西脇順三郎対談集(薔薇十字社)